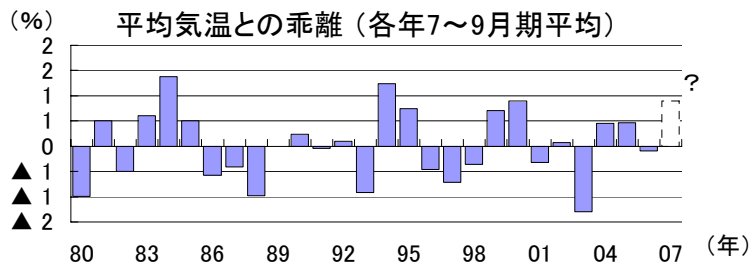


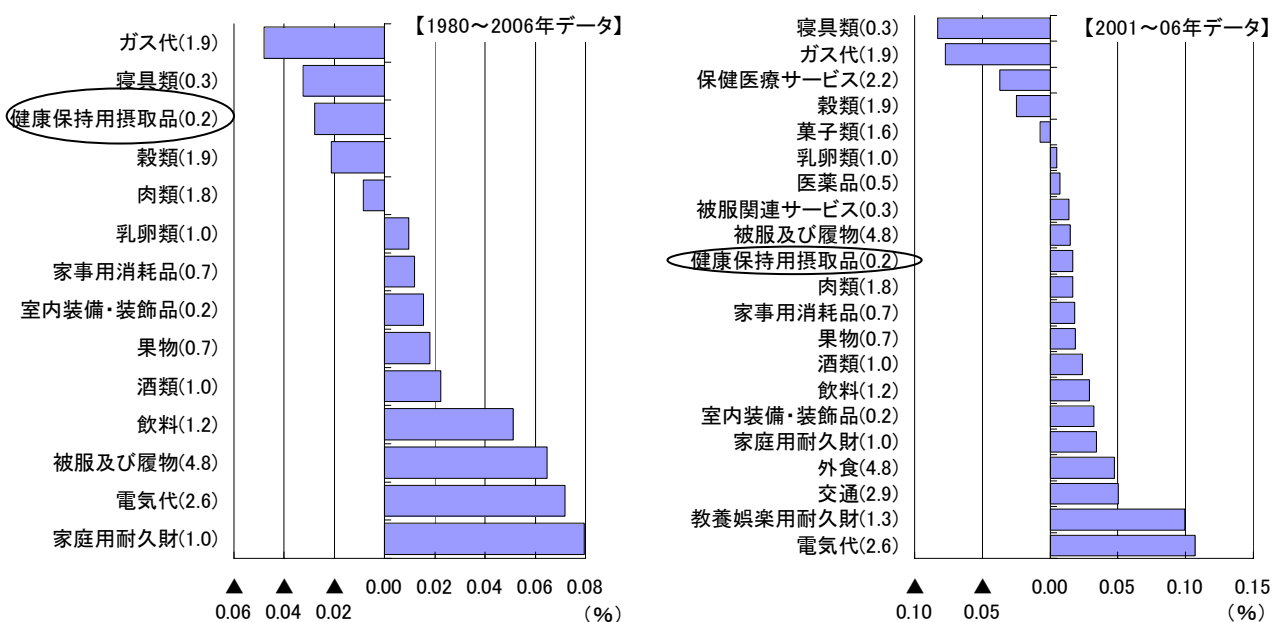
猛暑と個人消費 ～サプリで夏を乗り切る?～

- (1) 今夏は猛暑との予報を気象庁が発表した。夏の猛暑はマクロの個人消費にとってプラスとの評価が定着しつつあるが、以下では改めてその規模・内容の変化に注目して効果を試算。
- (2) 夏の気温と個人消費の関係を分析すると、個人消費に猛暑はプラスの効果。近年ではその度合いが強まる傾向。1980年から2006年までのデータから試算(*)すると、7～9月期の平均気温が1度上昇すると、マクロの個人消費を0.21%ポイント(年率0.82%ポイント)押し上げ。2001～06年のデータで試算すると(**)0.30%ポイント(年率1.21%ポイント)押し上げ。
- (*) 東京の平均気温(気象庁)と関東地区の世帯消費支出(総務省、CPIにより実質化)データからそれぞれ、トレンド、循環変動、季節変動要因を除いた異常値成分を抽出。平均気温・異常値との相関係数が0.3を超える消費支出・異常値を選択。平均気温・異常値で最小二乗法により回帰して得た個別項目の影響を合計した。
- (**) サンプル数が少なく、猛暑以外の要因による異常値を含む可能性は考慮する必要。
- (3) 内容を見ると、一貫してプラス効果が見られるものは、家庭用耐久財(エアコン等)、電気代(クーラー使用等)、被服・履物、飲料、酒類(ビール等)、果物。逆に一貫してマイナスなのは、ガス代、寝具類、穀類(米、パン、麺等)(*)。
- (*) なお、近年では、教養娯楽用耐久財のプラスが大きい。これは、計測上、気温の効果だけでなく、薄型TVブームによる押し上げ効果が出ているため。同様に、保健医療サービスのマイナスについても、医療費の自己負担増加が招いた支出抑制効果の可能性。
- 従来はマイナス効果が認められたが、近年はプラス効果に転じてきた点で注目されるのは健康保持用摂取品。**医療費抑制の反動ともみられるが、摂取のし易さの向上や効能の多様化が促したサプリ・ブームが続くなか、猛暑が疲労回復ニーズを高めることになるためと推察される。



(資料) 気象庁

7～9月期平均気温の1℃上昇が消費に与える影響(寄与度)



(*) 上記合計では、消費を+0.21%(年率+0.82%)押し上げ。
(資料) 総務省

(*) 上記合計では、消費+0.30%(年率+1.21%)押し上げ。
(資料) 総務省